

甲状腺外科草子 60

古文復習：桜の喜び

杉野 圭三

桜は奈良時代以降、各地で急速に植樹され多くの人をひきつけ、数多くの歌が詠まれた。

清少納言も（966?－1025?）「面白く咲きたる桜を、長く折りて、大きな花瓶に挿したるこそ、をかしけれ」と枕草子（第三段）で述べている。



伊勢大輔

八重桜

いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな（伊勢大輔、百人一首 六一）

一条天皇の時代、新参女房の伊勢大輔（989?－1060?）が奈良からの八重桜の献上品を前に歌を詠めと言われた時の歌である。本来この役目は紫式部の予定であったが、伊勢大輔に譲ったとのことであり、即興で歌を詠めと無理強いしたのが藤原道長とされ、有名な伝説となっている。

その時、「殿をはじめ奉りて万人感嘆、宮中鼓動す（袋草子）」とある。躍動感に溢れ、生命の輝きを表わした気持ちの良い桜の名歌である。



紀友則

京都御所 左近の桜

紀友則（845－907?）は古今和歌集の撰者の一人で紀貫之の従兄弟だが、多くの桜

の歌を詠んでいる。

春霞たなびく山の桜花見れどもあかぬ君にもあるかな（紀友則、古今和歌集 684）

次の百人一首の歌は最も有名な桜の歌である。

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ（紀友則、百人一首 三三）



権中納言匡房

行尊

入道前太政大臣

百人一首では他に 3 句が選ばれている。

高砂の尾の上の桜 咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ（前権中納言匡房、七三）

大江匡房（1041－1111）は権中納言に叙任され、「鎌倉殿の 13 人」で有名になった鎌倉幕府の大江広元は曾孫である。

もろともに あはれと思へ山桜 花よりほかに知る人もなし（前大僧正行尊 同六六）

行尊（1055－1135）は天台宗の僧侶、修験者としても知られ、能筆家、大僧正を授かる。

花さそふ嵐の庭の雪ならで ふりゆくものは わが見なりけり（入道前太政大臣、同九六）

西園寺公経（1171－1244）は太政大臣をつとめ、以後戦前まで続く西園寺家の祖であり、藤原定家の義弟でもある。



丸山公園枝垂桜

錦帯橋

参考資料

百人一首. 古今和歌集、新古今和歌集、ビギナーズクラシックス. 角川ソフィア文庫、Wikipedia 菱川師宣画（国立国会図書館蔵）

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2023年3月15日